パワーポイントを活用した初級文法の対比的導入について

山口　薫

要　　旨

日本語の授業でパワーポイントを使用して効果があったことは、既に多くの先行文献で報告されている。しかし初級文法を対比的に導入するスライドはあまり作成されていない。筆者は「焦点となる文法項目以外の条件は極力同じにし、ポイントのみを対比的に提示する」ことが大切だと考え、以下の文法項目や文型を導入するスライドを作成した。「は／が、～＋に／で／を、～に～がいる／～は～にいる、～て　きた／いく、～のだ、～ようだ、～て　いる／ある／おく」、アスペクト、可能動詞、自他動詞、授受表現、受身表現、敬語。このようなスライドを授業で活用することは、学習者にとって「文法や文型に対する理解が深まる。習得状況に応じた学びが可能になる。モチベーションが高まる」というメリットがある。また教師にとっても、「事前に授業の流れが組み立てられる。授業中、学習者の様子が観察できる。スライドに改良を加えていける。教師自身の成長につながる」というメリットがある。

キーワード：日本語学習者、パワーポイント（PPT）、初級文法、対比、導入

1. はじめに

日本語教師であれば誰しも、学習者から助詞の使い分けや文法項目の意味の違い、文型が使われる場面や状況の違いなどについて質問を受け、説明に窮した、という経験があろう。筆者も同様であった。もちろん、易しい言葉を使ったり、例文を挙げたり、簡単なイラストを描いたりして何とか説明していた。そして学習者も「わかった」と言ってくれはしたが、本当に理解されたのかどうか確信はない。

しかし、パワーポイント（以下、PPTと記す）を活用すれば、学習者の疑問の多くに答えやすくなることに気付いた。本稿では、これまでの論考や授業実践を参考にした上で、PPTの活用により日本語初級文法の導入が効果的に行えることを示していきたいと思う。

2. 先行文献

PPTを活用した授業の実践例は、これまでに数多く報告されている。内容面でも、漢字（池（2012））、文型の導入やドリル練習（小笠原他（2009）、松浦（2015））、聴解練習（宮内（2009））、会話練習（山元（2008））、プレゼンテーション（浅田（2012））、日本事情（稲村（2010））等、多種多様なものがある。また、メインテキストに準拠した総合的なPPT教材の提案として、北川他（2005）及び筒井他（2018）があり、様々な教室活動へのPPTの活用例を紹介したものとして山田（2017）がある。このように、教室活動全般にわたるPPT教材が多数作成され、実際の授業で使用されている。そして、PPTを活用した授業に対する学習者の評価はおしなべて高く（山元（2008）、小笠原他（2009）、稲村（2010）、池（2012）、松浦（2015））、「結果として試験で好成績を収めた」[1)]、「発展的な発表へとつながった」[2)]、などの報告もなされている。

一方、PPTを使用することのデメリットも挙げられている。それは、「学習者が授業の進み具合を早く感じる」[3)]、「学習者がスライドを眺めるだけでノートも取らず、受け身の姿勢になってしまう」[4)]、などである。ただ、それらはPPTというより授業運営上の問題であり、教師が学習者と丁寧にコミュニケーションを取りつつスライド送りをしていけば解決しうる問題だと考えられる。

以上、これまでに報告されたPPTの実践例をみてきたが、文法や文型の導入に関するスライドの多くは当該項目のみに焦点が当てられており、既習項目や他の類似項目との違いを対比させながら提示したものは少ないということがわかった[5)]。しかし学習者にとっては、既習文法との違いや、新出文法が複数ある場合はそれらの共通点や相違点が明確に示されてこそ、新出文法の意味や用法がより正確に理解できるのではないだろうか。初級文法を対比的に導入するPPT教材の開発が望まれるところである。

3. パワーポイントの活用

3.1. 日本語の授業でパワーポイントの活用することの一般的なメリット

日本語の授業でPPTを活用することの一般的なメリットとして、次のようなことが挙げられる。

まずどのような教材であれ、市販の教材を使用する以上、多かれ少なかれ学習者の学習／生活環境から乖離した場面で教授／学習活動が行われるのは避けがたい。しかしPPTを使えば、学習者が学んでいる学校周辺の場所や施設、建物等の写真をスライドに貼り付けたり、日時を授業日当日にしたりすることにより、場面を学習者の慣れ親しんだ環境に設定することができる。ネット上にあふれている無料のイラスト／写真素材を活用する際

には、ペイントソフトを併用して余分な箇所を削ったり改変を加えたりすれば、学習者の意識を必要な部分だけに向けさせることもできる。

様々な教室活動のうち、語彙の確認であれば、似て非なるもの、学習者が混同しやすいものの違いを視覚的に示すことができる。（例「ハンバーグとハンバーガー、アパートとマンション、グラスとガラス」）

パターンプラクティスなどの基本練習であれば、文字（フラッシュカード）や音声、イラストなど手を替え品を替えキューを出すことができる。加えてアニメーション機能を使えば、イラストなどの視覚情報により文を言わせた後、文字情報を出して確認させることも可能になる。その文字情報も、学習者に最も言わせたい箇所はそこだけ空欄にしておくこともできる。また、縦に並べた同種類の語彙の中から一つを選ばせ、一定の文型に沿った文を作らせることにより、日本語の「縦の関係」と「横の関係」[6] を意識化させることもできる。

会話練習では、学習者が発話したくなるようなイラストや画像（学習者の国の料理や観光地、日本のサブカルチャー等）を提示し、それをもとに学習者の発話を引き出し、話題を広げていくことができる。

更にJFスタンダードでは、「社会言語能力（相手との関係や場面に応じて言語を適切に使用する能力）や機能的能力（言語使用の役割や目的を理解した上で適切に使用できる能力）が、コミュニケーション言語活動の基盤となる言語能力として重要である」[7] とされているが、PPTのスライドを使えば、場面や機能を視覚化することも容易になる。

このようにPPTは、あらゆる教室活動において活用可能なのである。

3.2. 様々な文法項目の対比的導入

しかしながら、筆者がPPTの特性を最も活かした教授活動ができると考えるのは、文法項目や文型の違いを対比的に示し、それを学ぶことの意義を理解させる導入段階である。導入は、その後の基本練習や応用練習の基礎となる重要な段階であり、これをおろそかにすると授業全体が形式的なものになってしまう。

当該授業時間に扱う新出文法を導入するにあたっては、既習項目や他の新出項目と異なる点のみを変えた場面を提示していくのが効果的であると考えられる。しかし多くの市販教材では、それぞれが別のページで提示されているため、項目同士の比較がしづらい。それがPPTであれば、共通の場面の中での相違点（即ち、焦点が当てられている重要なポイント）がどこにあるのか、視覚的に示せる。しかも本時の項目と直接関係のない情報には説明に時間をかけなくてもいいので、効率的に行える。そして、背景（いつ、どこ、誰、何、等）や言語（既習の語彙、文型、表現）などの情報を順繰りに学習者に提示することにより、言語の意味や機能（登場人物は何をしようとしているのか、相手に何を求めてい

るのか、等）への気付きを学習者に促すことができる。

以下に、文法項目・文型と、作成したPPT教材（スライド）の具体例を挙げる[8)]。

・「は／が」

「は」と「が」の意味機能は、「旧情報／新情報」「主題／現象」等の文法用語で説明されるが、これらは学習者にとって難解なものであり、たとえ「old/new information」などの訳語を与えられたとしてもやはり理解不能である。しかしPPTを活用すれば、例えばニュースでアナウンサーがある出来事について第一報をし、続けてそれについて解説を加えるような場面をスライドで作成することができる。このような場面であれば、必ず「が」→「は」の順に使用されるので、「旧情報／新情報」などの用語を出さずとも「は／が」を使い分けるポイントを学習者に伝えられる。

・「（場所）＋に／で／を」

場所を表す名詞の後ろにつく助詞には「に／で／を」などがあるが、この使い分けがうまくできない学習者は多い。それぞれの助詞の意味機能は「状態、活動、移動」であり、後続する本動詞は「ある／いる、する、渡る／通る」などと決まっているのだが、学習者にとって使い分けるのは容易ではなさそうだ。しかし、「～に」の静止状態を動きのないイラストで、「～で」の活動を動きのあるアニメーション（gif）で、「～を」の移動をPPTの「アニメーションの軌跡効果」を使って表現すれば、三つの助詞がどのような文で使われるのか、視覚的に理解されやすくなる。

・「（場所）に（人／動物）がいる／（人／動物）は（場所）にいる」

「椅子の下に猫がいる」は動物に、「猫は椅子の下にいる」は場所に焦点が当てられた言い方である。二つの文型の違いはQ【&】A形式で導入してもいいが、PPTを使えば、状況がより明確に示せる。前者では、猫にぼかしを入れ「椅子の下に何かいるのだが、それが何かよくわからない」という状況を作り、後者では、「飼い主が猫を探していて（頭の中で猫を思い浮かべている）、椅子の下にいるのを見つけた」というストーリーを作るのである。学習者が知りたいのは、文型の意味の違いより、実際にどのような場面で使われるのか、であろう。

・「～て　きた／いく」（継続や変化）

「～てきた／～ていく」は、時間の流れに着目した表現である。「～てきた」は過去から現在への、「～ていく」は現在から未来への継続や変化を表す。PPTでは、スライドの真ん中を「現在」、その左側を「過去」、右側を「未来」と設定することにより、「時」を視

覚的に表せる。そして、矢印とともに同じ動作を並べれば「動作の継続」が、気温などを示せば「変化」が表現できる。

・アスペクト

日本語の動詞は様々な観点から分類されうるが、「継続動詞／瞬間動詞」もその中の一つである。この二つを区別するには、「時間の幅を表す言葉（例「1時間」）がつけられるかどうかテストする」、「『～ている』をつけて、『動作の進行／結果の状態』のいずれを表すか考える」といった方法がとられる。しかし、どちらもネイティブの語感を持たない学習者には難しいところである。だが、スライドに「食べる→食べている→食べた」と「割れる→割れた→割れている」のイラストを並べて載せれば、二つの動詞の種類が異なることばかりでなく、「瞬間」の意味や、辞書形が「未完了」を表すことなども視覚的に示せる。

・「～のだ（～んです）」

新出項目を導入するにあたっては、それが使われない文と比較しつつ示さないと、「新しく習った項目だから」と学習者がやみくもに使って不適切な文を産出してしまうことがままある。「～のだ」はその典型的な例だ。それを避けるために、例えば、研究者が大勢の人の前で自己紹介をしている場面と、研究に没頭しているところを見ている学生に説明する場面をスライドに並べて示し、前者では「～んです」を使わず後者では使うと教えれば、学習者が自己紹介する時に「～んです」を使うことはなくなるであろう。

・「～ようだ」

「ようだ」は、五官で感じ取った情報をもとに状況を推測する際に使われる。授業で導入する際には、言葉で説明するより、視覚、音声、におい、味などの情報のみを与え、学習者に状況を推測させるような指導が望ましい。PPTを使っても、授業中に匂いをかがせたり何かを味わわせたりすることは無理であるが、場面を見せ音声を聞かせることはできる。例えば、「事故が起きた」と一目でわかるスライドと、「交差点に人がたくさん集まり、パトカーも来ている。救急車のサイレンも聞こえる。しかし何が起きたのかはわからない。」という様子を表現したスライドを対比的に見せ、後者では「ようだ」を使うと説明すれば、「ようだ」の意味は理解されやすかろう。

・可能動詞

例えば、「行きません」と「行けません」では、「行かない」という結果は同じだが、その理由は全く異なる。もしカラオケに誘われた際の返事であれば、後者なら後日改めて誘われる可能性はあるが、前者なら二度と誘われないかもしれない。意志の有無を言葉で説

明するのは難しいが、話者の表情（前者：カラオケに全く興味がない様子。後者：時間、お金、宿題等何らかの外的な要因で行けないことを残念がっている様子。）で示せば、初級レベルの日本語学習者でも違いに気付くことであろう。

・「他動詞／自動詞」

焦点が当てられている項目以外の条件を揃えることにより、当該文法項目の意味を明確に示すことができる。「Nを開ける／Nが開く」の対比的導入の場合、「教室のドアを開ける」は学習者に簡単に見せることができるが、「教室のドアが開く」は無理である。市販の絵教材ではよく「人が自動ドアを通って、中へ入ろうとしているところ」が掲載されているが、「開く」が無意志動詞である以上、人物を見せるのは不適切である。そこで、ネットで検索した「人が電車のドアを開ける／電車のドアが開く」動画をスライドに貼り付けて、自他動詞の導入教材とした。

・「～て　いる／ある／おく」

「カーテンが閉まっている」も「カーテンが閉めてある」も、どちらも同じ状態を言い表すが、後者では背景となる目的や意図が含意されている。この違いをはっきりと示すため、「閉まっている」のスライドではその前後に何が起きたか何も示していないのに対し、「閉めてある」のスライドでは、その前に起きたこと（生徒がカーテンを閉めた）とその後に起きること（教室で映画を上映する）を画像やイラストで示した。これであれば、「閉めておく」が準備としての動作であることも、容易に理解されうる。

・授受表現

授受表現が難しいと感じられる理由の一つは、視点が発話者か第三者かによって表現が変わることにある。その点PPTでは、イラスト中の人物に吹き出しをつけることにより、誰の視点からの発話かを明示することができる。しかもイラスト中の人物やそのセリフを順繰りに出していけば、1枚の絵でもストーリー仕立てにして学習者に見せることができる。それにより、相手への依頼を前提とする「もらう／～てもらう」と、それを前提としない「くれる／～てくれる」の違いを示すことも可能になる。

・受身表現

相手が自分にしたことを嬉しく思うか不快に思うかによって、言い表し方は変わってくる。日本語では、前者であれば授受の、後者であれば受身の表現を使う。話者の気持ちと言語形式につながりがあるのである。「友達に難しい漢字を読んでもらった」であればにこやかな表情を、「友達に彼女からのメールを読まれた」であれば不愉快そうな表情を一

緒に見せれば、そのつながりが学習者に強く印象付けられることであろう。

また態が変わることを示すには、主語を赤い枠で囲むなどするといい。「ライト兄弟が飛行機を発明した」では「ライト兄弟」が、「飛行機はライト兄弟によって発明された」では「飛行機」が主語になることを明示するわけである。その際、前者の文は「ライト兄弟」の成長過程を、後者の文は「飛行機」の便利さを示した後で提示すれば、能動態／受動態の使われる文脈がより明確になることであろう。

・敬語

日本語は、相手との関係（年齢、立場、親疎等）や場面（フォーマル、インフォーマル）によって表現を変える言語である。敬語を導入する際に、それらについて教員が言葉で状況説明をしてもいいのだが、イラストや画像で見せれば一目瞭然であるし、敬語を使うべきシチュエーションか否かは学習者も雰囲気から感じ取れるものであろう。スライドの左側に同年代の友人、右側に目上の人を配置し、真ん中下にいる自分が双方に別々に話しかける、という場面を作ることにより、普通の表現と敬語表現を対比的に示すことができる。

3.3. 学習者にとってのメリット

新出文型を導入する場合、その前提となる話者と相手との関係性や場面について全て日本語で説明しようとすると、未習語彙や表現の使用が避けて通れないことが多い。たとえ既習の範囲内で収められていたとしても、全ての学習者が理解できるとは限らない。その結果、習得度の高い学習者と低い学習者の運用力の差がますます広がってしまう恐れがある。しかしスライドで提示すれば、どの習得段階の学習者であっても、それ相応の学びが可能になる。例えば、習得の早い学習者であれば、スライドを見ただけで場面や学習項目を全て日本語で表現し、それが正しいのかどうか確認することに重点をおいて授業に参加できるであろう。中程度の学習者であれば、順繰りに提示されるスライドや教師から与えられる状況説明により、未知のポイントを把握したのち、焦点が当てられている言葉や文型が次第に産出できるようになるであろう。習得の遅い学習者の場合は、既習事項にせよ未習事項にせよ、たとえ日本語でうまく表現できなくとも、最低限どのような場面でどのような文型が使われるのかは理解できよう。つまり、個個人の習得段階にかかわらず、どの学習者の満足度も高めることができるのである。

学習者にとってのPPT活用のメリットは、内容面でわかりやすい、というだけではない。教師が授業中に発する言葉は、会話で使われる言葉なのか、状況を説明するための言葉なのか、学習者への指示の言葉なのか、区別がつきにくいことがままある。そのような場合でもPPTであれば、イラスト中の人物のセリフと地の文が区別して示されるので、どのような目的で発せられた言葉なのか理解しやすい。また、自分にとって身近な環境や関心

をもっているものが教材化されるので、日本語学習へのモチベーションが高まる。しかも、スライドの提示により教師の言葉による説明が減る分、学習者の発話量が増えて練習量が多くなり、運用力の向上へとつながると期待される。

3.4. 教師にとってのメリット

PPTの活用は教師にもメリットがある。まず、実際に授業を行う前に頭の中で授業をイメージし、シミュレーションを行うことができる。余分な教室活動を削ったり、足りない活動を増やしたり、活動の順序を変えたり、用語や文型を一貫性のあるものにしたりして、授業の流れをよりよいものに変えていくことができるのである。授業中は、レーザーポインターを使えば、学習者の様子や反応をじっくり観察しながらスムーズに授業が進められる。また、学習者に言わせたい言葉や文法項目がある時、文中でその部分だけを空欄にして、学習者にそこに入る語句を言わしめることもできる。PPTがないと、教師が求める箇所の直前の言葉や助詞のイントネーションを上げたりして学習者の発話を促しがちだが、それは不自然なティーチャートークにつながり、自然な日本語を学ぼうとしている学習者にとって益はない。更にPPTのスライドは、一度作成してしまえば、あとはそれに改良を加えていくだけで、前回より今回、今回より次回と、回を追うごとによりよいものを学習者に提供できるようになる。そして何より、このようなスライドを作成しようとすることが、語彙や文型が使われる場面や特徴、類似項目との違いなどに気付くきっかけとなり、教師自身の成長につながるのである。

4. まとめ、今後に向けて

以上、初級文法の導入の授業でPPTを活用するとどのような効果が期待できるか、具体例とともに示してきた。導入の際に大切なのは、「焦点となる文法項目以外の条件は極力同じにし、ポイントのみを対比的に提示する」ことである。これは、教室の中で教師が実物や市販教材を並べて見せたりジェスチャーで示したりしようとしても、非常に難しい、或いはほぼ無理なことであり、PPTのスライドを使ってこそ可能になる。

ただもちろん、PPT以外の教材やレアリアを排除するものではない。例えば「これ／それ／あれ」であれば、教室の中で学習者に絵カードを持たせて導入を行った方が、「こそあ」を使う際の自分と相手の位置関係が学習者によく理解されることであろう。また「～のに使う」の文型では、そろばん、風呂敷などの実物を持参して学習者自身に触らせ用途を確かめさせた方が、学習者の印象に残ることであろう。

このようにして、他の教材やレアリアとうまく組み合わせながら、PPTを日本語の授業の中で活用していきたいと考えている。

（注）

1） 北川他（2005）p. 12、小笠原他（2009）p. 104，110
2） 稲村（2010）p. 152，158
3） 池（2012）p. 42
4） 松浦（2015）p. 34，36
5） 松浦（2015）では使役と使役受身（p. 35）が、筒井他（2018）では自他動詞（p. 68，69）が対比的に示されているが、PPTの特性を活かしたスライドとは言えない。
6） 庵功雄（2018）p. 143
7） 国際交流基金（2017）pp. 7–8
8） 市販教材のイラストや、ネットで検索したイラスト／写真／動画を多数使用しているので、著作権の関係によりスライドの掲載は控える。

参考文献

浅田和泉（2012）「パワーポイントを使用したプレゼンテーションについて　―日本語学校における実態調査および実践例―」『日本語教育方法研究会誌』19(2)：pp. 14–15.
庵功雄（2018）『一歩進んだ日本語文法の教え方　2』くろしお出版
池絵里子（2012）「パワーポイントを用いた初級漢字導入の実践と可能性」『JSL漢字学習研究会誌』4：pp. 37–43.
稲村すみ代（2010）「パワーポイント利用による日本事情教育を取り入れた授業実践の一例について」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』36：pp. 147–160.
小笠原雅子・静谷麻美（2009）「パワーポイントを活用した初級授業の試み」『独立行政法人　日本学生支援機構　日本語教育センター紀要』5：pp. 98–111.
北川逸子、阿部美恵子、坂東正子、高岸雅子（2005）「パワーポイントを用いた提示型日本語教育教材の開発」『龍谷大学国際センター研究年報』14：pp. 3–14.
国際交流基金（2017）『JF日本語教育スタンダード【新版】利用者のためのガイドブック』
筒井通雄、榊原芳美、渡会尚子、岡まゆみ（2018）『マルチメディア日本語基本文法ワークブック』ジャパンタイムズ
藤本かおる（2019）『教室へのICT活用入門』国書刊行会
松浦梓（2015）「日本語初級授業におけるパワーポイントの有効活用―よりよい授業のための「補助ツール」として―」『独立行政法人　日本学生支援機構　日本語教育センター紀要』11：pp. 33–39.
宮内俊慈（2009）「パワーポイントによる日本語教育の実際」『関西外国語大学留学生別科　日本語教育論集』19：pp. 127–142.
山田智久（2017）『日本語教師のためのTIPS77　第2巻　ICTの活用　第2版』くろしお出版
山元淑乃（2008）「パワーポイントを用いた文型学習―「主語」を導入しない第一課―」『琉球大学留学生センター紀要留学生教育』5：pp. 51–63.

A Power Point Introduction to Elementary Japanese Grammar that Uses Contrasting Examples

Kaoru YAMAGUCHI

Abstract

The effectiveness of using Power Point in Japanese language lessons has already been reported in many previous studies. However, there are not many slides that introduce elementary grammar with contrasting examples. I think it is very important to make the learning conditions consistent as possible, except for the grammatical items to be taught and to clarify these points with contrasting examples. So, I have created Power Point slides that introduce the following grammatical items and sentence patterns: "ha/ga, ～ ni/de/wo, ～ ni ～ ga iru/ ～ ha ～ ni iru, ～ te kita/iku, ～ noda, ～ youda, ～ te iru/aru/oku, aspects, potential verbs, intransitive/transitive verbs, giving and receiving expressions, passive expressions and honorific expressions." Utilizing such slides in lessons has several advantages for learners. "They can deepen their understanding of grammar and sentence patterns. It becomes possible to learn Japanese according to their degree of acquisition." And their motivation increases. In addition, for teachers, the advantages are that, "They can think about the structure of the lesson in advance. They can observe the state of learners during class. They can improve the slides each time. And finally, that it leads to growth as a professional teacher."

Keywords：learners of Japanese, Power Point, elementary grammar, contrast, introduction